開高健　花終る闇

開高健

花終る闇

新潮社

花終る闇（はなおわるやみ）

著者　開高健（かいこうたけし）

印刷　一九九〇年三月二五日

発行　一九九〇年三月三〇日

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

振替　東京四―八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社　製本所　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格は函に表示してあります。

© Takeshi Kaiko 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-304907-3　C0093

目次

花終る闇　5
一日　177

装画　岸田淳平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花終る闇

花終る闇

日は出で日は入り、またその出し處に喘ぎゆくなり。風は南に行き又轉りて北にむかひ、旋轉に旋りて行き、風復その旋轉る處にかへる。

『傳道之書』

月　日

漂えど沈まず。

新しい作品の題をそうときめ、原稿用紙に書きつけたけれど、それきりである。一歩もさきへでられない。かれこれ一年にもなるのだが、一語も書きだせないでいる。毎日、ただ寝たり、起きたり、沈んだ大陸のことを書いた本を読んだり、推理小説を読んだりするだけである。正午すぎと夕方に駅前の大衆食堂へ食事にでかけるほかは、人にも会わず、パーティーにもでず、酒場にもいかない。会いにくる人もないし、電話もかかってこない。この一年間にしたことといえば部屋にこもって読んだり寝たり、寝たり読んだりで、原稿用紙は机にひろげたきりである。しばらくほっておくと薄く埃りがたまったり、日光に焼けて黄ばんだりするので、新しい紙に表題を書きなおし、

古いのは丸めて捨て、それだけすると何か一仕事した気持になって、またよこになる。

書きたいことが何もないから書けないのではない。たくさんあるのに書けないのである。それは凝視するとこっそり遠ざかっていき、無視すると足音をしのばせて近寄ってくる。東に陽炎がゆらめき、西に逃げ水が輝いているといってもいい。近寄ってきた気配を感じて体を起し、机にむかうと、たったそれだけの動作なのにたちまち消えてしまい、私はしなやかに痺れてしまって、万年筆をとりあげることもできなくなる。新しいウォッカの栓を切るときとか、夜ふけに便器にすわったときなど、ふいに一言半句があらわれることがある。ついで衝動がやってくる。朝露のキラキラ輝やく広い草原がひろがるのを感じたり、港をめざして進んでいく上潮の深くてゆったりとしたうねりを感じたりする。それにそそのかされて一言半句はあッというまに根を伸ばし、幹をたて、枝をはびこらせて、一つの短篇ができあがるのである。観察しすぎるほど観察したいくつもの光景や顔が、さまざまの方角からかけよってきて、熟練の軽業師となり、あるものは動機となり、あるものは静機となり、前面で跳躍したり、背景をつくったりし、一瞬のうちに長篇ができあがることもある。酒瓶や、夜ふけや、トイレがなくても、デパートのタバコ売場、地下鉄の夕刊売場、通りすがりの女の眼、耳たぶをかすめる若い娘たちの低い笑声などにふれるだけで、それが起ることもあった。けれど、発生するたびにそれらはちょっと眼を凝らして注視するうちにたちまち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

褪せたり、罅が入ったり、粉末になったりし、じたばたするゆとりもなく遠ざかっていった。何度も何度もそうなるので、いまではそれは作品の私にたいする媚び、または挑発と感ずるようになり、すぐには呼応しないことにしている。贋物にかぎってキラキラするものである。

題がきまらないことには私は手も足もだせない。これまで、ときには、題にもたれかかることだけで書いたことも何度かあった。題はまぎれもなく作品そのもので、作者にとっては顔であり、遠い前方の山頂でもあるが、同時に巣でもある。毎夜そこから出発して彷徨にでかけ、夜明けにちょっとした荷物をおいて帰ってくる。しばしば荷物を背負ったままで帰ってくることもある。無慈悲な日光の射す時間を何とかして耐え、つぎの夜ふけになるとまた歩きだしにかかり、少しずつ距離をのばしていく。けれど、あるときには、題がブーメランのように感じられることもある。それは投手の手から飛んでいって獣に命中し、その地点へ獣といっしょに落ちるけれど、命中しなければ推力を更新して舞いもどる。うけそこねたら投手を獣として倒してしまうことがあるとされている。作品の序・破・急や、起・承・転・結のどこかで完全燃焼が作者に発生し、冷めた熱狂がやってきたら、そのときはブーメランが獣に命中したのだから、自身の武器に倒される恐怖や用心は忘れていいし、倒れた獣をめざしてかけだすだけでいいのである。つまり、作品の題を執筆中の作家が忘れてしまうようだと、

そのときになって作品ははじめて作品になる。または、なりはじめる。
題がきまったときに武器は投げられているのである。私は前方に獣を見たと思ったのである。題は何度もためらったあと、何年間も心の薄暗い箇処に保存しておき、酒や、気まぐれや、日光や、おしゃべりや、食事などであらゆる方角からヤスリにかけ、その苛酷な歯に耐えのこって、はっきりと手ごたえのある用具になったと感じたから紙に書きつけたのである。少年時代の後半期か。青年時代の前半期か。いつ。どこで。どんな書物で読んでおぼえたのか。忘れるともなく忘れていたその銘句が霧のようなもののなかからふたたびあらわれて原稿用紙に移植されたとき、私は作品がこちらをふりかえって正面から顔を見せてくれたと感じた。その言葉から放射されていくものと、どこからかそこへ集結してくるものとが、まざまざと感じられた。その言葉は歳月をへだててよみがえってからも何年間かほりっぱなしにして野ざらしにしておいたのだから、いろいろな耐性がつき、いつ題として採用してもいいというところまできていたので、あとはちょっと手をのばすだけのことだったとも私は感じた。
どこに誤算があったのか。それがわからない。題を紙に書きつけた翌日の夜から私は不能症に陥ちこんでしまったのである。毎夜のようにおまじないとして万年筆に新しいインキをいっぱいつめたり、夜ふけに野良猫を見に近所の町内を一巡したりするのだが、何の効果もなかった。万年筆をとりあげようと思うたびにどこからともなく

薄甘い、おぼろな、しかしきびしい痺れが這いだしてきて全身にひろがる。放射するものが見え、集結してくるものが見え、獣の走るのが感じられるのに、ただ私は何時間もあぐらをかいてすわりこんだきりである。ときにはウォツカの一滴が舌で炸けるたびに、作品のどこかで使おうと思っているイメージの群れがつぎからつぎへとあらわれてくることがある。うつむいている女の横顔や、雨にうたれて額に貼りついている髪や、アフリカ西海岸の港町の椰子並木を頭に荷物をのせてすたすたと歩いていく黒人女の影や、亜熱帯アジアのゆっくりと流れる黄いろい大河や、花、灯、歯の閃めき、走る群集、香水瓶の小さな林にある静寂、それらおびただしいものが泡のようにあがってきては消えていく。せめてメモにでも書きとめようとして体を起すと、それだけの動作で何もかもが消えてしまうのだ。武器はととのったと感じたし、獣は走るのが見えたと思ったし、数年間息をためたあとで一擲したと思った。けれど獣はやっぱり走りつづけている。それはまざまざと見える。武器は私をめがけて舞戻りつつあるのだろうか。それとも、私はうけそこねて倒されてしまったのだろうか。

今日もおなじことだった。

正午すぎに眼をさまし、顔と口を洗ったあとで駅前の大衆食堂へいき、『アジ・フライ・定食』を食べてもどってきた。アジのフライにプラスチック製の丼鉢一杯の飯がつき、それにくたびれたワカメの味噌汁と、干からびかかったタクアンがつく。ア

ジのフライはいちいち揚げたてのをだぞと念をおさないことには冷汗でぐんなりとなったのをだされる。ワカメの味噌汁は熱いだけが取柄で、煮くたれたワカメは萎びた破片でしかないので、七味唐辛子をふりかけてひきしめる。これだって罐に錆びがでていて、すっかりバカになっているから、よほど入れないことにはピリッとこない。タクアンについては老婆の乳首を噛んだらこうでもあろうかと思いたいところだが、あまりその想像にとどまっていると具体感が思わず歯と舌にきそうになるので、かけまわる給仕娘の腰でも眺めたほうがいい。それは眼や口とおなじように活潑で、いきいきと放埒である。図太くて、にぶく、貪欲そうに見える。けれど、何といっても若いということがある。青臭くてきつい匂いが何かとむれあってたじたじとなるかもしれないけれど、少くとも果汁でいっぱいではあるだろう。眼にあるねっとりとして傲然とした濁りを見ると、誰しも昨夜の叫喚と浸出を察せずにはいられなくなるけれど……

アパートにもどってから寝床にころがってバンコックの中華街の菜館の菜単（メニュー）を読んですごした。昨日は香港の上海老正興菜館のだった。アトランチス大陸や絶滅しつつある蝶類のことを読むのもいいが、中華料理の菜単は消閑に何よりである。奔放、華麗、精妙、玄怪、さまざまの字が並んでいて、ひらいた瞬間にあちらこちらの字から精が蜂のように飛びたってくるのが見える。書棚にはぎっしりと本がつめこんであっ

て、カーテンをつるして見えないようにはしてあるけれど、ちょっとひけばたちまち本の背表紙が見える。すぐさま字から精が飛びたってくるが、それは私を刺さずにはいられないし、いまの私はどんな毒にも耐えられそうにないから、いそいでカーテンをひいてしまう。激越、温厚、清新、どんな作風であっても、他人の作品に暗示をうけたくないのである。哲学も文明論も避けたいのである。姙娠中の女が食物を選ぶように私は読物を厳選しなければいけないのである。だから、この一年は、アトランチス大陸や、滅びつつある獣や、宝石伝説や、園芸の本ばかりを読んできた。菜単を読んで消閑することをおぼえたのはごく最近のことだが、これはほのぼのとなることができる。食べた料理については記憶を研磨してもらえるし、まだ食べたことのないものについては憧れや想像を培養してもらえるという功徳がある。

『酔蟹(ツエイシエ)』。
『炒禿肺(チヤオトウフエイ)』。
『紅焼魚唇(ホンシヤオユイチユン)』。

この三つのまわりをしばらくいったり、きたりしてすごした。さきの二つはすでに食べて知っているけれど、最後の一つはまだ知らない。『酔蟹』は蟹を生きたままで足を藁で縛り、壺にひたひたの紹興酒、そこへ陳皮や若干の不思議な香辛料を入れてから浸けたものである。切って皿にのせられたところを見ると、肉は蠟化しかけたム

ーン・ストーン、赤い卵はねっとりと濡れたルビーのようである。歯で殻を噛んでとろりとなったのをおしだすと口いっぱいにほのかな醇香がみなぎるのである。『炒禿肺』はこの菜単をもらったバンコックの満堂紅酒家で食べたことがある。魚の肝臓だけを集めてよく洗い、こまかくきざんでゴマ油で炒め、そこへ香菜(シャンツァイ)を加えてあったように思うのだが、微妙な、気品のあるほろにがさがあって舌をひきしめられた。酸・苦・甘・辛・鹹の五味のうち、苦(にがみ)は舌を洗って一新してくれるから、もっとも貴重で高位の味ではあるまいか。しかも、もっとも微かに、もっともほんのりとしていなければなるまいから……かねてからそう思うことがあったので、それが思いもかけずゴミ箱行きの屑も同然のものから作られたとわかって、さらに感じ入らせられたのだった。わざわざコックのところまでいって説明を聞いたのだけれど、そうしたくなるものがあった。

最後の『紅焼魚唇』はまだ食べたことがないので、ちょっと戯れていられた。〝紅焼〟だから醤油で煮込んだ料理だろうが、魚の唇といってもさまざまである。魚の唇だけを醤油で煮込んだというのだが、鮒なのか、草魚なのか、それとも海底の巨大なモロコなのか。そこのところがわからない。魚の唇はゼラチン質でねっとりとし、ぶるぶるしているから、眼玉や、頬肉や、脇腹や、内臓とおなじようにうまいものである。おそらくどの魚の唇でも脂があってうまいだろうと思うが、とりわけどの魚の唇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com